

【朧月】おぼろづき

・おぼろ夜のかたまりとしてもものおもふ 加藤楸邨

「思ふ」の語源は「重し」と同根だそうです。
楸邨の句は、朧な気の漂う夜の中に蹲り、もの思う心の重さと、肉体の重さををかさねて表現しています。心(精神)と肉体は西洋哲学では対立概念として捉えることが多いようですが、この句は両者をひと塊として捉えたところに妙があると思います。

春の季語としておなじみの霞、朧は気象学用語にはなく、現代気象学では一年を通じて霧・靄(もや)というのが正式名称だそうです。水平方向の見通しが1 km未満のときは霧、1 km以上見通せる薄い霧を靄というそうです。

霧の季語は秋に属します。霞は日中だけに限られ、夜の霞を朧(おぼろ)というのです。

朧とは、ぼうっとしてはっきりしない状態のことです。

遠く幽かに聞こえる鐘の音を鐘朧といいますので、視覚に限るものではないようです。

朧に関連した朧月、朧月夜は当然春の季語になります。その他、同義の歌語に「かすめる月」「おぼろなる雲月夜」などが見られます。平安時代からの言葉のようです。

煌々と完璧な円や弧を描く月に対し、霞んだ朧月は、いわば不足・不完全の美の象徴として古来論じられてきました。

吉田兼好は

「花は盛りに、月は隈(くま)なきをのみ、見るものかは。雨に対(むか)ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行くへ知らぬも、なほ、あはれに情(なさけ)深し。」『徒然草』第137段

[花は盛りのときだけを、月はかげりなく輝くときだけを褒め称えるものであろうか]と評価しています。

皆様よくご存知の「月も雲間のなきは嫌にて候」という言葉は『禅鳳雑談』に記された村田珠光の言葉です。先の『徒然草』が下敷きとなっているのでしょう。

この言葉は、完全主義的な唐物の美に対する侘茶の美意識を言い表しているといわれています。侘茶を語るには欠かせない数少ない珠光の伝えです。

兼好、珠光両者に共通する不足・不完全を評価する美意識は無常観と侘茶の関係を示しているのかもしれない。

「菜の花畑に入日薄れ…♪見渡す山の端かす一み深し♪」ご存知『おぼろ月夜』です。この歌いいですね。最近、安田祥子さん、由紀さおりさんの歌を聴き改めて好きになりました。日本はよい歌、美しい言葉の宝庫だと思います。